

アフリカの人々と名付け 6

親をふしだらだ、邪術師だと告白する名前

小馬 徹

配偶者が互いを風刺する赤ん坊の名前は、我々日本人にとっては大きな驚きである。

しかしアフリカでは、この種の名前は珍しくない。たとえば、南部アフリカのグエイ人のある男は未婚の愛人に子供を産ませた。偶々彼女が他の男とも付き合っていたので、「オレに濡れ衣を着せるのか」ととぼけた。子供は、「濡れ衣」と名付けられた——ただし、この例は男の自己主張だったらしい〔菅原和孝「婚外性交」『現代』1995年3月号〕。

母はグウタラ、父は酔っぱらい

ウガンダとスーダンに住む中央スーダン語系農耕民ルグバラ人の名前には、次のような奇態なものがある〔Middleton, J. “The Social Significance of Lugubara Personal Names”. *The Uganda Journal*, (25), 1961〕。

「肉、ちっとも」、「放浪の最中に」、「良き物を投げ与えられて」（両親は、親族の間を食物を乞い回っていた）、「毛虫」（他に食うものがない）。両親の絶望的な貧しさが、これらの名前のテーマなのである。

「怠惰の中で」（両親は怠惰）、「憤怒の中で」（母は何時も父の親族にもっと精励しろと罵倒されている）、「鶏はおしまい」（最近母は父の鶏を幾羽か食べてしまった）、「あげない」（母は父に決して満足な食事を供さない）、「ビール壺の中で」（父は酔漢）、「夜に」（父は夜は母と床を共にするのに、日中は母親への助力を拒む）。これらの名前は、

親の倫理性を鋭く問い詰めている。

母は姦婦、父は人殺し！

さらに、両親の性的逸脱を露骨に表した名前さえもある。「空っぽの場所の」（母はよく藪をうろつき回った——姦通のために）、「鳶」（父は鳶か鷲のごとく方々を徘徊して女を漁った）、「生まれたからには悶着」（不義の子と思われている）、「男たちが妨げる」（母は以前に何人かの男に嫁いだが、彼らは皆不稔だった）。

もっと凄いの、父や母が妖術師や邪術師だ、人殺しだと告白する名前だ。「多くの人々が倒れた（死んだ）」（父は妖術師）、「わが死のため」（人々は父が妖術師で人殺しだという）、「呪い」（父は呪われた）、「殺害において」（母は邪術師で、他の女を殺した）、「言葉の」（両親は隣人と口論した：「言葉」はしばしば妖術を示唆する）。

死と両親の不行跡に因む名の多さ

他には婚資の支払いに触れて、「なしで」（父は母の親族への婚資支払いを履行しない）、「牛を繋ぐ杭を持ち去る」（父は全ての牛を婚資として支払った。そしと母の親族の貪欲さに不平を鳴らす）などの名前がある。

ミドルトンは、以上の全てを赤ん坊の両親の倫理性に関わる名前として一括している。ルグバラ人によると、貧乏や親戚の少なさはある程度は本人の振る舞いが原因であり、女

性の不妊は彼女自身か夫の良からぬ振る舞い
があたとなった結果なのだ。

驚くべきことに、彼が集めた850例の内、
510例(60.0%)までがこの範疇の名前だ。
そして、死に関わる名前が144例(16.9%)
を占める。一方、両親の倫理性に関わらない
名前や赤ん坊の属性に因む名前は、各々108
例(12.7%)と88例(10.4%)に過ぎない。
なんと、深く鬱屈した感情を吐露しない名前
は、全体の4分の1にも満たないのだ。

農耕民と牧畜民

リンハートは、ニョロ人のこれとよく似た
命名法に驚き、それを南スーダンの西ナイル
語系の牛牧民であるディンカ人の命名と対照
する。そして、ディンカ人の中には恨みや妬
みを個人名に折り込んだ例は一つとしてない
と述べた [Lienhardt, G., "Social and Cultural
Implications of Some African Personal
Names" *JASO*, 19(2), 1988]。南ナイル語系
の農牧民であるケニアのカレンジン諸民族で
も、事情はディンカに等しい。

ルグバラやニョロでは、近い父系氏族員が
集まって村を作る。様々な他氏族から村に嫁
いで来る女たちは、複雑な親族の義務に取り
巻かれ、且つその濃密な関係の中で孤絶して
いる。ビーティーは、隣人の悪意を仄めかす
命名がニョロ人の日常生活を強く支配する緊
張や不安に捌け口を与えていると言う。また
「叙死名」は、死が蔓延する現実を直視する
事によって、たとえ象徴的・詩的ではあって
も問題に対処しようとする姿勢を生むのだと
考えている [Beattie, "Nyoro Personal
Names", *The Uganda Journal*, 21(1), 1957]。

邪術と呪詛 — 秩序を支える二つの論理

そう、神や魔、あるいは死霊や祖霊だけが
死をもたらすのではない。いや、人間関係そ

のものに深く内在する邪術や妖術こそが、そ
れ以上に大きな死の原因であり得るだろう。

これまでに言及した諸民族では、一般に、
妖術は隣人の中の、邪術は僚妻(一人の男性
の複数の妻)の間の現象だと考えられている。
ルグバラ、ニョロ、テンボなどの農耕民は氏
族(の分節)が村を作り、日常的で緊密な相
互扶助や労働交換の枠組みを構成する。

一方、カレンジンやディンカ、フルベなど
の牧畜民は、広大な土地に氏族員が分散して
住み、様々な出自の人々が入り交じって村を
形成する。カレンジンでは、僚妻同士さえも
互いに遠く隔たって住み、相互扶助も嫉妬も
遙かに希薄になる。農耕民に比べると、概し
て牧畜民は独立的で個人的な傾向が強い。

濃密な関係を生きる農耕民の間では個人間
の軋轢は大きく、邪術・妖術は不幸や病気・
死の最も重要な解釈原理になっている。だか
ら童名に強烈なメッセージを託して家族や隣
人を論難するのは、自己防衛の適切な慣用手
段となる。凶星を指されれば邪術師や妖術師
も、少しは用心して手控えよう。誰もが告発
の応酬を通じて自分の姿勢を正すのだ。

牧畜民の間では、邪術や妖術の役割は呪詛
に比べて小さい。不当な攻撃を受けた人物は
その正当性のゆえに、他人を呪う大きな力を
得る。罪人を特定できなくても呪えばよい。
また、「罪」それ自身が罪人を罰するから
(自動呪詛)、罪人は決して死を免れない。
邪術・妖術は不幸の原因を自分の外に見出し、
一方呪詛は自分の中に見出そうとする。どち
らも人々の行為を統制し、社会秩序を維持す
る有効な枠組みだが、それらに基く不幸や死
の現象解釈は個人の心を境として逆方向のベ
クトルを持つ。深く鬱屈する心理がメッセ
ージとなる「演歌」としての童名は、邪術・妖
術が卓越する社会に広く見られる。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)